

平成28年 第10回 (定例会)

厚真町教育委員会会議録

1 開会

平成28年7月29日 (金) 午後1時33分

2 閉会

平成28年7月29日 (金) 午後3時16分

3 出席委員の氏名

佐藤 泰夫 伴 俊行 森本 早苗 長門 茂明 兵頭 利彦

4 委員及び傍聴人以外の会議出席者氏名

生涯学習課長 沼田 和男

【書記】学校教育G主幹 木戸 達也

5 会議録署名委員の指名

(森本 早苗)

(兵頭 利彦)

6 教育長報告

(1) 行事参加等の動向

(資料1)

【質疑なし】

(2) 議会議員町内行政視察 7月14日 (木)

(資料2)

- ・スケートリンク整氷車格納庫・管理棟建設工事 (新町)
- ・厚真中学校屋体天井改修工事
- ・厚真中学校屋体大規模改修工事
- ・厚真中学校屋体系統温風暖房機改修工事

【質疑なし】

7 所管報告

学校教育グループ

- (1) 7月4日 (月) 鶴川漁業協同組合厚真ホッキ貝漁業部会から学校給食センターへホッキ貝むき身40kg相当が寄贈され、7月20日 (水) の学校給食に「ホッキカレー」として提供

- (2) 北海道市町村教育委員研修会／7月7日（木）／札幌市／教育委員3人参加
- (3) 第1回社会科副読本改訂委員会議（7月8日開催）について（資料3）
- (4) 7月14日（木）JA とまこまい広域厚真町ハスカップ部会から学校給食センターへハスカップ7kg相当が寄贈され、7月15日（金）の学校給食に「デザートソース」として提供
- (5) 第1回厚真町教育委員会外部評価委員会／7月19日（火）／青少年センター
- (6) 第2回厚真町学校運営協議会設立準備委員会（7月21日開催）について（資料4）
- (7) 厚真町「子ども教育委員会」（7月25日開催）について（資料5）
- (8) 第2回厚真町学力向上推進委員会／7月25日（月）／青少年センター
- (9) 厚真町授業づくり研修会（7月26日開催）について（資料6）
- (10) 近藤・中村奨学金給付者について（資料7）

【質疑】

佐藤委員長：学校教育グループから10点の報告がありました。何かお聴きになりたいことがあればお願いします。

長門委員：コミュニティ・スクール導入に向けた講演会が行われたようだが、参加者の講演を聞いた感想などはアンケートなどをもって把握しているのか。コミュニティ・スクール導入するのはハードルが高いのかそれとも低いのかの反応を知りたい。

沼田課長：参加者からのアンケートは今回はとっていない。

兵頭教育長：委員や一般の方も含めてコミュニティ・スクールがどのようなものなのかという理解を進める研修会であったので、協議を進めていって厚真町としてどのような形にしていくかという方向性がでてきたら、厚真地区や厚南地区で保護者や地域の方々を対象にした説明会をしていかなければならないと思っている。その時に長門委員が言われた意見などが出てくるのではないかと考えている。

沼田課長：講師の出口先生からは、コミュニティ・スクールの文部科学省の考え方や事例など説明があった。今後、9月20日に道内の先進地である十勝管内浦幌町等に視察を行い、活動状況について研修を深めていく予定である。

兵頭教育長：コミュニティ・スクール（学校運営協議会）は、今ある学校関係者評価委員会と大きく関わりが変わってこない。学校運営に意見ができると言っても、単に学校を中心として子どもたちの成長を学校だけにまかせるような協議会ではなくて、家庭教育を含めて地域全体の教育力を高め、家庭の役割、地域の役割、学校の役割を明文化して、それぞれ責任をもって子どもたちの成長と学びを支えられるような組織になればと考えている。

社会教育グループ

- (1) さわやか町民登山会／7月3日（日）／千歳市「風不死岳」／14名参加
- (2) サップ体験会／7月9日（土）／軽舞第2ダム／13名参加
- (3) 文化協会「第24回カルチャーバス」／7月18（月）／札幌市／42名参加

- (4) 少年の主張胆振地区大会／7月20日(水)／むろらん広域センタービル
出場者 厚真中学校 2年 大宮蒼子／発表題「心の交流で解決を」最優秀賞受賞
- (5) 青少年健全育成メッセージ伝達／7月21日(木)／各学校
- (6) 議会総務文教常任委員会所管事務調査／7月21日(木)／議会会議室 (資料8)
事務調査／上厚真放課後児童クラブの運営状況について
- (7) 「世界の昆虫展」／7月23日(土)～8月16日(火)／青少年センター
- (8) ホログラフィー展／7月23日(土)～8月16日(火)／青少年センター

【質疑なし】

8 協 議

(1) 海外修学旅行について

- ・旅行会社の海外修学旅行実施状況 (資料9-1)
- ・高等学校の海外見学旅行実施状況 (資料9-2)
- ・今後の海外修学旅行実施の見通し
- ・英語教育の充実に繋げる検証の方策

【質疑】

佐藤委員長：教育長と課長から説明がありました。皆さんの意見などはありますか。

森本委員：旅行会社を比較してみると、ある旅行会社は詳細な回答のようだ。

沼田課長：記載されている旅行会社の内2社は大手の業者で、1社は海外派遣等に特化している業者である。詳細な記載をしている業者は、説明した方も添乗した経験があることから詳しく説明をしていただいたことにより、回答内容の記載量に軽重があることを理解してもらいたい。

森本委員：この他の業者にもアンケートを行う予定なのか。

兵頭教育長：これ以上の業者へのアンケート等は考えていない。3社を比べてみても、保護者が心配している健康面や安全面における対応は甲乙つけがたいものとなっている。また、保護者に説明するにしてもこのままではなく、3社のものを1つにまとめてより簡略的にわかりやすく提示し説明したい。

伴職務代理：保護者に簡略化してわかりやすくしても、必ずしも功を奏するものにはならないと思う。始めに不安と思ったなら親は最後まで不安感が残る。これで改善されるものでもない。別な修学旅行の形態があってもいいと思うし内容的にはいいとは思いますが、すべての人がよいと思わないかぎり実施することはむずかしいと思う。

おそらく保護者全員が諸手をあげて賛成してくれるものにはならないと思うし、実施しづらい。教育長が言ったように、ある時点できっちりと判断し、なぜ取りやめるかを伝えなければならぬし、希望者の派遣に移行していくことも必要ではないかと思う。

兵頭教育長：参加希望をする子どもたちを拒まないよう選考実施しながら、また、行ってきた良さを友達に伝えていけば、すそ野が広がっていく。

伴職務代理：そのような進め方のほうが良い気がする。何年か実施し、すそ野が広がり全員で行って
みょうという形のほうが現実的なように思う。

兵頭教育長：今までの保護者との協議の中でも、希望者が行けばいいという意見はあった。全員の学
習につなげるという学校の考え方もあるので、その辺を含めて学校と協議をしていき
たい。

長門委員：最後の章にあるように、英語教育の検証の方策のひとつとしての修学旅行という考え方
ですから、別の検証の手段も併せ持ってひとつの形をつくるのがいいのかということだ
と思う。

兵頭教育長：以前はここでけじめをつけて、再度、新たな考え方でいこうと考えたが、それをすると
次いつ提案するのかということになり、ただ時間だけがかかる。選考実施も含めてどう
なのかで判断しないとだめでないかと考えている。選考実施しても例えば5人くらいの
希望者しかいないとなるとこの事業は時期尚早なのかとも考えてしまう。

長門委員：手上げ方式だとして、行った子どもたちからはホームステイなどの経験から検証し、行
っていない子どもたちも何か別の手立てで実力をきちっと検証して全体の評価の中で
表現することも必要なかもしれない。

兵頭教育長：継続的に全員を派遣するのは経費的にむずかしい。人数を限定して派遣を続けるか、姉
妹校を締結し、その学校との行き来をできるようにするのかだと思っている。成績だけ
でなく、さまざまなことの評価基準を設け、例えば10人などの人数を限定した派遣を
したらよいのではないか。行かない子どもについては、英語教育全体として何をするか
方策を明示していく必要がある。

伴職務代理：教育長の考え方でよいと思う。2本立てでいって1本を生かし、何年か後に実現する
という形にした方がよいと思う。

長門委員：実施時期ひとつとっても、選択しづらい時期である。

兵頭教育長：ある高校の海外への修学旅行のことを聞いた話では、高校が修学旅行を行うには姉妹校
提携をしなければならないということだ。また、ある高校は学校訪問はしているよう
だが姉妹校締結はしているようにはみえない。道教委も海外の修学旅行になると高校教育
課になるとある校長から言われた。しかし、修学旅行でなくなると道教委との調整も必
要なくなる。

伴職務代理：将来的に義務教育学校でも海外に行く学校が出てくる可能性もあるのだから、対応でき
ないことにはならないと思う。

兵頭教育長：道教委には、グローバル人材の育成を掲げているのだから、高校だけでなく中学校でも
そのような機会を奨励するようなことを北海道の次の計画に謳っていないと、やっ
ていることと言っていることが違ってくると思う。そうすることによって自治体も道に後
押しされていると実感できる。

佐藤委員長：以前、町が行っていた海外派遣事業は希望者の手上げによるものだったと思うが。

兵頭教育長：希望者多いので選考を行っていた。

佐藤委員長：どれくらいの人数を派遣していたのか。

兵頭教育長：20人程度派遣したようだ。

伴職務代理：現在だと20人は学年の生徒数の3分2くらいになってしまうので、10人程度が適当ではないかと思う。

兵頭教育長：対象学年を決めて、上限枠を設けない手立てもある。

伴職務代理：上限枠を設けないほうが全員で行く修学旅行に繋がっていく可能性が高いと思う。

兵頭教育長：下限も決めて、希望者がそれ以下なら実施しないことも考える必要がある。

伴職務代理：行ってきた子どもたちが、行っていない子どもたちへ波及効果があればよいと思うので、ある程度の人数がいらないといけない。

兵頭教育長：そのような方向で学校とも協議していきたい。進捗状況についてはお知らせする。

9 その他

(1) 厚真町教育振興基本計画（概要版）について

(資料10)

【質疑】

佐藤委員長：厚真町教育振興基本計画（概要版）について何かあればお願いします。

伴職務代理：カラーはやはり見やすい。

長門委員：概要版の配布対象はどうなっているのか。

沼田課長：600部印刷し、小中学校の保護者に配布し、配布の方法については、学校を通じて配布を予定している。

兵頭教育長：新入学する保護者にも随時配布をする。また、教育委員会が所管する各委員会の委員にも配布する。

沼田課長：本冊・概要版については、町のホームページにも掲載し、また、青少年センター図書室にも置いている。

(2) 教育委員道内視察研修について

- ・日程（1泊2日）
- ・視察内容
- ・視察地（道内）

【質疑】

佐藤委員長：今まで道東、道南方面に視察をしてきたが、どこか希望があればお願いします。

伴職務代理：将来的に本町も小中一貫校へ移行する考え方もあるので、小中一貫教育について視察してみたい気はする。

兵頭教育長：今までの視察は、本町の直近の教育課題や教育振興計画に盛り込む施策について視察をしてきた。本町はすでに様々なことで町内4小中学校が連携して取り組んでおり、今後となると、法律的に義務教育学校という制度もできたので、本町の小中一貫教育が当てはまってくる。

道内ではなく、本州などの先進的な小中一貫教育を行っているところを時間に余裕をもちながら視察研修を行った方がよいのではないかと思います。そうすると予算も必要となるので、今年度は取りやめて来年度の予算に反映させたほうがよいと思う。

英語教育も特例校として行っているが、今春から義務教育学校制度ができたので小中一貫教育の中の連携教育となる。これを進めていくといつかの時点で一環教育型にすべきであるということが文部科学省の考え方である。現在の制度は連携することは一環教育の制度を使っていくしかなくなる。なおさら本町の研究活動そのものが一環教育とリンクすることになる。分離型も含めてその仕組みがどのようなものなのか情報収集は少しずつ行った方がよいと考えている。

長門委員：無理して課題をさがして視察してもあまり効果がない。本町のオリジナルで施策を行って、先進地と比較する見方がよいのではないかと感じている。

兵頭教育長：本町の4人先生が道外の研究大会に参加しているが、その中で、小中連携という冠やテーマを掲げているが内容を聴いていくと、ひとつの学校だけであるとか、特定の先生だけが連携しているとかで、全体で繋がっているものではなかったということであった。先日、来町した道外の教授は、本町のように小中学校の先生が一堂に会して研修をおこなっていることは大切なことであるが道外の県でも少ないらしい。全国の小中連携そのものがそのような課題を背負っている。本町が行っていることは連携になっているが、その仕組みや制度を関連させていけば厚真オリジナルになっていくと思う。

伴職務代理：制度を関連させていけば今よりも効率的な連携になれると思う。カリキュラムは9年間のスパンで考えていけるから、英語教育は行っているが今よりも充実したものとなっていく気がする。

兵頭教育長：英語だけに限らず他の教科も充実する。また、生活習慣などの本来家庭教育ですべきことを学校が費やすことがなくなると、先生方が授業などに集中する時間を生み出すことができる。コミュニティ・スクールを作る上でそのような仕組み取り入れないと学校にしわ寄せになる。

兵頭教育長：今年度は視察は実施しない。視察も単年度で終わるのではなく小中一貫教育の在り方について何年間か継続できたらよいと思う。

【追加】厚真高校生徒の通学に関するアンケートの結果についての説明

10 次回委員会の開催日程

・8月29日(月) 午後1時30分(予定)

11 閉会